

神楽歌「杓」の歌詞の異同とその解釈

——平安期写譜本と古今和歌集・古今和歌六帖を対象に——

田林千尋

一、はじめに

宮廷における御神楽は、踐祚大嘗祭の清暑堂御神楽が成立した貞観元（八五九）年から内侍所御神楽が成立した一条天皇の御代、遅くとも寛弘二年（一〇〇五）まで約百三十一―百五十年をかけて整備された。現在、平安時代の御神楽のまとまった写譜本は、伝藤原道長筆『神楽和琴秘譜』（十世紀末―十一世紀初頭の写。以下、適宜「和琴秘譜」と称する。以下同）、伝源信義筆『神楽歌』（十一―十二世紀の写。以下、「信義本」）、八俣部重種注進『神楽歌』（十二世紀頃までの写。以下、「重種本」）、書写者不詳、鍋島家蔵『東遊歌 神楽歌』（文治年間以前の成立。以下、「鍋島家本」）の四本が確認されている。また、『古今和歌集』（以下、「古今集」）、『古今和歌六帖』（以下、「六帖」）、

『拾遺和歌集』（以下、「拾遺集」）等の和歌集にも神楽歌の歌詞が和歌として収められている^①。これらの平安期写譜本や和歌集に収められた神楽歌の歌詞には、大小の本文異同が見られる。

さて、近代以降の神楽歌の歌詞の注釈書では、一貫して鍋島家本や同系統の譜本^②、あるいはそれらを底本とした近世の注釈書^③等が底本として用いられてきた。これは鍋島家本が最も網羅的に異本の歌詞を収録しているためである。だが、同譜本に本文注や裏書の形で収められている歌詞や、他の古写譜本の歌詞の一つひとつについて、十分に考察を加えている注釈書は見あたらない^④。しかし、実際に御神楽の場で歌われた譜本や、同時期の和歌集に収められた歌詞本文の異同が、神楽歌の歌詞の解釈や成立・変遷を知る上で重要であることは改めて述べるまでもない。

そこで、本稿ではそのような本文異同のある神楽歌の一つ、「杓」の歌詞に注目する。

御神楽の曲を、①神を御神楽の場に迎え、その依代となる神座（これを「採物」と呼ぶ）を言祝ぐ「採物」、②御神楽の場を下りた神を宴遊によって慰める「前張」、③神を御神楽の場から返し、御神楽の終演と名残惜しさを歌う「星」の三つに分類した場合、「杓」の曲は冒頭の「採物」に含まれる。歌意の中心となるのは、曲名の通り、採物である「杓」に対する言祝ぎである。

「杓」とは、瓢箪などウリ科の植物、とくにその果実のことである。『日本書紀』巻第十一「仁徳天皇十一年十月の条には、次のような記事が見られる。

水防工事の成就のため武藏人強頭と河内人茨田連杉子の兩名を入柱にせよとのお告げが天皇に下り、強頭は入柱になつて堤防が成る。一方、杉子は「全 匏^{かぼち}兩箇^{ふたご}」を川に投げ入れて、「河神崇りて、吾を以ちて幣^{まひ}とせり。是を以ちて、今し吾来れり。必ず我を得むと欲はば、是の匏を沈めて、な^う泛^{あは}せそ。則ち吾、真神^{まごのかみ}といふことを知りて、親ら^{みよみ}水中^{かほのみ}に入らむ。若し匏を沈むること得ずは、自づから偽^{いつはり}神といふことを知らむ。何ぞ徒^{いとがら}に吾が身を亡さむ」と言う。川の神はこの杓を水に沈めることができず、杉子は入柱にならな
いまま堤防が成る。

この話では匏は水神を試す道具に用いられており、匏と水神、そして水との関係性をうかがわせる。

また、二十卷本『倭名類聚抄』巻十六「木器類第二百三」六丁オモテには、「杓（瓢附）唐韻云杓（音與酌同。和名比佐古）。斟^{しん}水器也。瓢（符音反。和名奈利比佐古）。瓠也。瓠（音與護同）。匏也。匏（薄交区。可^レ為^レ飲器）者也。（一）内は割注を表す。私に句読点及び返り点を付した。以下同」とあり、瓢箪の実を割つたものを水や飲料の器として利用していたことがわかる。歌詞解釈については後に詳述するが、神楽歌で歌われる杓もこの器様のものを指している。杓が採物になり得たのは、器様の杓が御神水や神酒を汲むために用いられたからにほかならない。

また、先述した通り、神楽歌の整備には約百三十―百五十年の時間がかけられており、各曲が御神楽として成立した時期は異なる可能性がある。「杓」の曲に関しては、古今集巻第二十「神遊びの歌」の「採物の歌」（一〇七九番歌）に神楽歌「杓」末歌が収められていることから、遅くとも古今集成立時点までに成立していることがわかる。

次に、近代以降の注釈書にしたいがい、仮に鍋島家本を底本として神楽歌「杓」本末の歌詞の異同を挙げた。異同は通説にしたいがい、左から書写年代の古い順に並べている古今集、六帖は別途右に掲げた^三。

杓

本

(六) みづを

(六) てくみて

(編右注) みづを

(編右注) ひさしして

(重) みづを

(重) (なし)

(和) みづを

(和) (なし)

おほはらや せがみのしみづ

ひさしもて

(六) あそびてゆかん

(六) (なし)

(編右注) あそびてゆかん

(重) (なし)

(重) くみてあそぶむ

(重) (なし)

(和) あそびてゆかん

(和) (なし)

とりはなくとも あそぶせをくめ あそぶせをくめ

末

(六) わがやどの

わがよどの

いたみのしみづ

さとゝほみ

(六) 水草おひにけり

(六) (なし)

(重) 水草おひにけり

(重) (なし)

(編右注) みづくまおひにけり

(重異説) 水くまおひにけり

(重異説) 水さるにけり

(重) 水くさるにけり

(和) みくさおひにけり

(和) みくさおひにけり

ひとしくまねば みづさびにけり みづさびにけり

(六) :古今和歌六帖(六)

(七) :古今集

(編右注) : 鍋島家本文右注 (書き込みがあるときのみ)

(重異説) : 重種本文左「異説」(ある箇所のみ)

(重) : 重種本

(和) : 神楽和琴秘譜

※底本(以下「鍋」ともする) : 鍋島家本

本歌第二、三、五、六句、末歌第一、五、六句に異同が見られる。本論では、これらの異同について各歌詞の解釈を試み、異同の生じた理由等についても可能な限り検討を加える。なお、異同箇所以外は、既存の本文解釈に疑義あるいは新たな解釈案がない限り、それらを参考にして解釈した。

また、神楽歌の歌詞解釈の方法として、本論では和歌に用いられる語を中心に参考とした。先にも述べた通り、神楽歌の平安期写本は四本しか現存が確認されていない。催馬楽や風俗歌、東遊歌等、他の平安期歌謡を合わせても平安期写譜本の数は限られており、神楽歌の歌詞に用いられる語の解釈を行うには充分とはいえない。

その点、和歌は平安期の実作が数多く現存している。歌

謡と和歌は、ことばを歌唱するか否か、すなわち音楽性を伴うか否かという点で大きな違いがある。また、歌謡の歌詞は五七五七七の短歌型に限定されないという点でも、平安期の和歌とは異なっている。しかしその一方で、神楽歌をはじめとする歌謡の歌詞には短歌型を持つものがある点、また、もともと和歌として成立していたものに後に曲を付けて歌謡としたものと推測される例がある点^(六)等、両者の境界は非常に曖昧でもある。古今集、拾遺集等の勅撰集や六帖等に歌謡の歌詞が収められていることから見ても、両者の親和性は疑えない。

以上のことから、和歌解釈や歌語等を歌謡の歌詞解釈に応用することも可能だと考えられる。

二、本歌の本文異同とその解釈

最初に、神楽歌「杓」本歌の異動を再掲する。神楽歌譜本所収の歌詞は、最も古いとされる和琴秘譜を底本にし、通説にしたがって左から書写年代の古い順に並べ直した。六帖は別途右に掲げた。

(六) てくみて
〔扇右注〕 ひさして

(七) しみつ

おほはらや せがゐのみづを

ひさこもて

(八) あそびてゆかん

(九) あそびせきくめ

(一〇) くみてあそびむ

(一一) あそびせきくめ

とりはなくとも **あそびてゆかむ**

このうち鍋島家本のみが第六句を記している点に関しては、御神楽の場で実際に歌唱する際の繰り返しを表記しているか否かという違いであるので問題としない（末歌第六句も同様である）。

以下、それぞれの異同を詳細に見ていく。

まず、第二句末が、鍋島家本のみ「しみづ」となっている。「みづを」であれば明らかに目的語であるが、「しみづ」であれば目的語か否かはこの箇所のみでは判断しがたしい。検討は後に回す。

次に、第三句である。鍋島家本文右注の第三句が「ひさこして（手段・方法の格助詞）」となっていることから、和琴秘譜、重種本、鍋島家本の「ひさこもて」の「もて」は、手段・材料を表す「以て」であると考えられる。

さて、各神楽歌譜本の第三句が「ひさごもて」であるの
に對し、六帖一三四一番歌の第三句は「てにくみて」とな
っている。

神楽歌譜本のとる「ひさごもて」という句は、散文・韻
文通じて用例がほとんど見られない。「ひさご」を「以て」、
「ひさご」を「して」でも同様である。上代では、『日本
書紀』卷第十一 仁徳天皇六十七年十月の条に「三の全瓠
を以て水に投れて曰はく（以三全瓠投水曰）」の例があ
り、中古でも『大鏡』第二卷に「小桶こぶくに小匏こぼしてをかけた
れば」の例がある。また、鎌倉時代の私撰類題和歌集『夫
木和歌抄』には次の例が見られる。

七五六 おもしろくなりぞゆくなるひさごもて神のこころ
をくみてけるかな

（卷第十八 冬部三 天仁二年十一月家の歌合、
神楽 修理大夫顕季卿）

平安時代の用例としてはこれが孤例であるが、これは神
楽歌「杓」本歌を本歌取りしたものである。

一方、六帖一三四一番歌第三句の「てにくみて」は、そ
れほど数は多くないものの、平安期の和歌に例が見られる。

三三五 山しろのゐでのたまみづてにくみてたのめしか
ひもなきよなりけり

（六帖 第五 雑思 「いまはかひなし」）

二八六 ぬるみゆくいた井のし水てにくみてなほこそた
のめそこはしらねど

（宇津保物語 「祭の使」 兵部卿宮）

二〇〇 はるくればなはしろみづをてにくみていそぐぞ
あきのたのみなりける

（六条齋院歌合 「なはしろ」 右せじ）

六帖歌は、神楽歌の歌詞よりも、より一般的な表現を採
用しているといえる。

最後に第五句である。和琴秘譜、鍋島家本本文右注、六
帖では「あそびてゆかむ」、重種本では「くみてあそばむ」、
鍋島家本では「あそぶせをくめ」と、それぞれ大きく異な
っている。

「あそびてゆかむ」という句は、『萬葉集』、『散木奇歌
集』の和歌に用例が見られる。

五二 月夜よし川の音清しいぎこに^五行くも行かぬも

遊びて行かむ^五

月夜吉 河音清之 率此間 行毛不^レ去毛 遊而將^レ

帰

(萬葉集 卷第四 相聞 「太宰帥大伴卿被^レ任

大納言「臨入京之時」、府官人等饒^レ卿筑

前国蘆城駅家^レ歌四首」防人佑大伴四綱)

三三 ひざかりはあそびてゆかん影もよしまのはぎ

はら風たちにけり

(散木奇歌集 第二夏部 六月 「樹陰風来」)

一方、「くみてあそばむ」、「あそぶせをくめ」といった句は、韻文・散文通じて他例を見ない。「あそぶ」と「くむ」の組み合わせでも同様である。

和琴秘譜は、現存する神楽歌譜本でもっとも古いとされている。末歌の異同本文については次章で詳述するが、同譜本の「杓」末歌第五句が古今集所収歌(一〇七九番)と同じ形であることから、和琴秘譜の歌詞は平安期写譜本の中でも古体を残しているといえる。したがって、「杓」本歌第五句に関しても、和琴秘譜やこれと同系統と見られる鍋島家本文右注、六帖の「あそびてゆかむ」が古体であ

ると考えられる。では、なぜこの第五句「あそびてゆかむ」には異同が生じたのだろうか。

御神楽の歌詞の異同は、歌い継がれる中で次第にことばが変化していったのだとするのが一般的である^{二〇〇}。たしかに、そのようなことは往々にして起こっただろう。しかし、譜本がある以上、元の歌詞がどのようであったかは、歌い手には明らかである。なにより「杓」本歌第五句の異同は、口承の過程で次第に生じたとするには流動性が高い。そこで本論では、今ひとつの可能性を指摘したい。

先に述べた通り、和琴秘譜や鍋島家本文右注、六帖の第五句「あそびてゆかむ」は、神楽歌の歌詞としては古体であると考えられる。また、和歌のことばとしてはもっとも穏当である。しかし、歌詞全体を見たとき、和琴秘譜や鍋島家本文右注の歌詞では、「せが井の水を」「杓でもつて」「いろうするのか」の部分のはっきりとは読み取りにくいことがわかる。

おほはらや せがみのみづを ひきこもて どり
はなくとも あそびてゆかむ

(和琴秘譜・鍋右注)

ただし、第四句「とりはなくとも」の「とり」を「鳥」

と「取り」の掛詞だと考えると、和琴秘譜や鍋島家本本文右注の歌詞において、第二句「水を」を目的語とする語は、第四句の「取り」であると解釈することができる。

「水（を）取る」という表現は、『日本書紀』巻第二神武天皇即位前紀戊午年十一月の条「菟田川の水を取りて（取「菟田川水」）等の例がある。また、和歌にも次のような例がある。

三四五 天橋も 長くもがも 高山も 高くもがも 月
読の 持てるをち水 い取り来て 君に奉りて
をち得てしかも（二）

天橋文 長雲鴨 高山文 高雲鴨 月夜見乃
持有越水 伊取来而 公奉而 越得之旱物
（萬葉集 卷第十二 雜歌二十七首）

二三 むすぶ手にとりてや夏をすてつらんあたりすず
しきやどのまし水

（文治六年女御入内和歌 入内御屏風和歌）

また、『倭名類聚抄』には、水晶の異名として「水取る玉」の名が見え（二）、鎌倉時代に入ると和歌にも詠まれるようになる。

一七 たもとには水とる玉もつつまぬを月の光にまづし
ほるらむ
（石清水若宮歌合 廿番左持 公仲朝臣）

しかしながら、平安期までの「水（を）取る」の用例は多くはなく、一般的な表現であったとは言いがたい。和琴秘譜の第四句「とり」が、「鳥」と「取り」の掛詞であったとしても、解釈の難しい歌詞だったであろうことがうかがえる。

一方、先に述べたように、重種本第五句の「くみてあそばむ」、鍋島家本第五句の「あそぶせをくめ」も、句としては当時一般的な表現ではなかった。しかし、「水を」「汲む」という表現そのものは、散文でも韻文でも一般的に用いられている。また、重種本、鍋島家本、六帖の歌詞には、他動詞「汲む」の語が共通している。

おほはらや せがみのみづを ひさこもて とりはな
くとも くみてあそばむ
（重種本）

おほはらや せがみのしみづ ひさこもて とりはな

くとも あそぶせをくめ あそぶせをくめ

(鍋島家本)

おほはらや せがみのみづを てにくみて とりはな
くとも あそびてゆかん

(六帖)

重種本では「せが井の水を」(第二句)、「杓でもって」(第三句)、「汲んで」歌舞の遊びをしよう(第五句)、「鍋島家本では「杓でもって」(第三句)、「わたしたちが歌舞の遊びをしている瀬の水を汲みなさい」(第五句)とあるように、神楽歌譜本では第五句に「汲む」の語が置かれる。一方、六帖では「せが井の水を」(第二句)、「手に汲んで」(第三句)と第二句に「汲む」の語があるため、第五句が和琴秘譜と同じ「あそびてゆかむ」(歌舞の遊びをしている)であって、も全体の意味は通る。和琴秘譜や鍋島家本本文右注の残す古体の歌詞に比べ、六帖や重種本以降の譜本の歌詞では、「せが井の(瀬の)水を」「どうするか」がはっきりしているのである。

以上を鑑みるに、神楽歌「杓」本歌第三句、第五句の大きな本文異同は、歌詞に「汲む」の語を取り入れるために生じたのではないだろうか^(二四)。現存最古の神楽歌譜本『神

楽和琴秘譜』の「杓」本歌の歌詞には二つの問題点があった。すなわち、第二句「みづを」を目的語にとる語が第四句の掛詞「取り」である^(二五)としか考えられないこと、そして、この「水(を)取る」という表現が当時一般的なものではなかったことの二点である。その問題点を克服し、より一般的な表現に改めるため、「汲む」という語を新たに取り入れようとして意図的に歌詞が改変された可能性がある。このとき問題となるのは、何でもって「水を」「汲む」のかという点である。

前章で述べた通り、神楽歌「杓」は、御神楽の中で「採物」と呼ばれる歌謡の一群に属しており、歌の中心は、御神楽の場で神座となる採物「杓」への言祝ぎである。神楽歌に九曲十五種類ある採物の歌の中、八曲十三種類がその採物の名を詠み込んでいる。にもかかわらず、「杓」の曲では、本末歌を通じて「ひさご」の語が見られるのは本歌第三句のみである^(二六)。したがって、神楽歌「杓」本末歌を通じてもつとも重要な語が、本歌第三句の「ひさご」の語であるということになる。実際、和琴秘譜、重種本、鍋島家本のいずれの神楽歌譜本も、第二句「ひさご」の語には異同がない。

他方、六帖一三四一番歌では、第二句は「てにくみて」となっており、「ひさご」の語が失われている。

六帖では、神楽歌の本末とは逆順ではあるものの、第二帖宅部「井」の冒頭に、神楽歌「杓」の末歌（一二四〇番歌）、本歌（一二四一番歌）を二首まとめて収めている。

つまり、この二首について、神楽歌「杓」の曲を典拠とした曲だと認識していたのである。にもかかわらず、六帖は、神楽歌の採物の歌としてもっとも重要な「ひささ」の語を捨て、「手に汲みて」を第三句に据えた形で本歌を収録している。これは、六帖における神楽歌「杓」本歌（一二四一番歌）の中で重視された語が、あくまでもその収録項目名「井」に關係する「せが井」という井の名であったためと考えられる。逆にいえば、六帖は一二四〇番歌（末歌）、一二四一番歌（本歌）が神楽歌「杓」の歌詞であることを重視していなかった。そのため、六帖は神楽歌の採物の歌としてもっとも重要な「ひささ」の語を重視する必要もなかったのである（二五）。

また、神楽歌譜本第五句の異同が以上のような恣意的な改変によると考えると、先に結論を保留した鍋島家本第二句の異同も解釈を決定できる。鍋島家本では第五句「あそぶせをくめ」の中に「汲む」の目的語である「瀬を」が存在している。そのため、和琴秘譜や重種本の第二句末にある「みづを」という目的語は、鍋島家本では不要になる。その結果、鍋島家本では第二句末が「しみづ」という体言

止めになつてゐるのだと考えられる。つまり、鍋島家本の第二句末「しみづ」は、呼びかけや詠嘆を表す体言止め表現であると解されるのである。

最後に、各異同本文の解釈を挙げておく。

(六) 水を 手に汲んで、

(鍋) 水よ。 杓でもって、

(重) 水を 杓でもって、

(和・鍋右注) 大原の せが井の水を 杓でもって(取り)、

鶏鳴と共に夜が明けようとも、

(六) 歌舞の遊びをしていこう。

(鍋) わたしたちが歌舞の遊びをしている瀬の水を汲みなさい。

(重) 汲んで歌舞の遊びをしよう。

歌舞の遊びをしていこう。

三、末歌の本文異同とその解釈

次に、神楽歌「杓」末歌の異同の検討に移る。末歌の歌詞も、和琴秘譜を底本として再掲しておく。

(六) わがやど

わがよどの いたゐのしみづ さとゝほみ

(六) 水草おひにけり

(六) (なし)

(七) 水草おひにけり

(七) (なし)

(編右注) みづくさおひにけり

(編) みづさびにけり

(編) みづさびにけり

(重異説) 水さゐにけり

(重異説) 水くさゐにけり

ひとしくまねば **みくさおひにけり** **みくさおひにけり**

まず、第一句の「かど」と「やど」については、「庭先」、「家の戸口のあたり」といった意味で、広義では互いに指す場所を通じること。

また、第二句から第四句までは異同がない。第一句から第四句までの大意はどの本もほぼ同じ、「わたしの家の前の板筒井の清水は、人里離れたところにあるので人が水を汲まないために」である。

この末歌で注目すべきは第五句、第六句の異同である。和琴秘譜では「みくさおひにけり」、古今集、六帖では「水草おひにけり」、また、和琴秘譜と同系統と見られる鍋島家本文右注では「みづくさおひにけり」とある。それが、

重種本本文左「異説」では、第五句が「水さゐにけり」、

第六句が「水くさゐにけり」となる。ただし、本来第六句は第五句の繰り返しであること、重種本には他にも誤字脱字が見られることなどから、ここでは第五句は「水くさゐにけり」から「く」が落ちたものであると考える。また、重種本、鍋島家本の第五句は「みづさびにけり」である。

さて、以上のような神楽歌「杵」末歌第五句の異同本文は、語句の点から次の三系統に分けられる。すなわち、①和琴秘譜の「みくさおひにけり」、古今集、六帖の「水草おひにけり」と鍋島家本文右注「みづくさおひにけり」の一群、②重種本本文左「異説」の「水くさゐにけり」、そして、③重種本、鍋島家本の「みづさびにけり」である。次に、これらについて、それぞれ解釈していく。

最初に、和琴秘譜の「みくさおひにけり」、古今集、六帖の「水草おひにけり」と鍋島家本文右注の「みづくさおひにけり」についてである。

和琴秘譜の「みくさ」とは、古今集や六帖にある「水草」のことである。ただし、これらの漢字表記はそれぞれの底本にしたがったため、古今集諸本や永青文庫本六帖では同語は「みくさ」と表記されている。鍋島家本文右注の「みづくさおひにけり」も含め、これら四つの本文を漢字仮名交じりで表記するとすべて「水草生ひにけり」となる。

「水草」を「みくさ」と読むか「みづくさ」と読むかは、文章によってまちまちである。和歌では短歌型の音数によつて「みくさ」とも「みづくさ」とも詠んでいる。第一章で触れたように、歌謡の歌詞は必ずしも短歌型に収まるとは限らない。しかし、神楽歌の採物に分類される他の九曲十四種類二十八首がすべて短歌型であることを鑑みれば、当該箇所も「みくさおひにけり」とする和琴秘譜の形が適当であるう。

「みくさおひにけり」は、『萬葉集』の時代から和歌のこ
とばとして用いられている。

三六 古の古き堤は年深み池のなぎさに水草生ひにけり

昔者之 舊堤者 年深 池之 激尔 水草生尔家里（二）

（萬葉集 卷第三 雑歌「山部宿禰赤人詠」故太政

大臣藤原家之山池「歌」一首）

三七 風さむくなりにし日よりあふさかの山のいへるは

みくさおひにけり

（好忠集「中の冬、十一月上」）

（一〇） さみだれはちかくなるらしよど河のあやめの草も
みくさおひにけり

（拾遺集 卷第二 夏「延喜御時歌合に」
よみ人しらず）

「みくさ」は、『萬葉集』三七八番歌では「池のなぎさ」
に生え、『好忠集』三二一番歌では「家井」に、拾遺集一
〇八番歌では「淀川」に生えている。また、拾遺集一〇八
番歌では、「あやめの草」を「みくさ」と呼んでいる。こ
れらの他にも「みくさ」の用例は枚挙にいとまがない。総
じて、「みくさ」は水際や水中に生える植物の総称である
と見られる。

次の和歌は、神楽歌「杓」を本歌取りしている。「かき
わけて」水辺に下りると詠んでいることから、ここに詠ま
れた「水草」は、背の高い植物であることがわかる。神楽
歌「杓」末歌の「水草」もある程度高さのある水生植物で
あると認識されていたと考えられる。

三七 おほはらやせがゐのみぐさかきわけておりやたた
ましすずみがてらに

（好忠集「五月中」）

ただし、『好忠集』三二一番歌のように「みくさ」の様
態が文脈からは判断できない例もある。そのため、「みく

さおひにけり」と詠む際の「みくさ」がすべて背の高い水生植物を指していたとは言いきれない。また、いずれの場合も「み(づ)くさおひにけり」は、「水草が生えてしまつたよ」という意味である。

次に、重種本本文左「異説」の「水くさゐにけり」についてである。「水くさ」の読みはやはり不明であるが、この場合、「みづくさ」と読むと短歌型としては字余りになるため、「みくさゐにけり」が穩当だろう。

重種本本文左「異説」の特徴は、先の一群で「生ひにけり」となっていた箇所が、「ゐにけり」になつている点である。ここで言う「ゐる」とは、「こほりゐししがのからさきうちとけてさざなみよする春かぜぞふく(『詞花和歌集』巻第一 春 一 大江匡房)」、「つららゐてみがける影のみゆるかなまことにいまや玉川の水(『千載和歌集』巻第六 冬 四四二 崇徳院)」等の「ある」と同様に、水面に動かないものが生じることである。したがって、重種本本文左「異説」の「水くさゐにけり」は、「水草が生じてしまつたよ」という意味である。

さて、「水草ゐにけり」の用例の中には、この「水草」が背の高いものであると考えられるものがある。

七 今とはといひはなちてし池水はきしにもまさるみ

くさゐにけり

(定頼集「第二類本」)「おなじ比、ひんがしおもてに、きくのもとに、人のおこせたりけるうたを、女房どものいふをきけば、かくあり」

右の例では、「池水」に「ゐ」た「みくさ」の高さが「きしにもまさる」ほどであるというのだから、この「みくさ」は水中からある程度の高さをもつて生えていると考えてよい。

その一方で、次のような例もある。

心のどかに暮らす日、はかなきこといひ／＼のはてに、われも人もあしういひなりて、うち怨じて出づるになりぬ。端の方にあゆみ出でて、おさなき人をよび出でて、「われはいまは来じとす」などといひをきて出でにけるすなはち、はひ入りて、をどろ／＼しう泣く。

「こはなぞ、／＼」といへど、いらへもせで、論なうさやうにぞあらんとをしはかるれど、人の聞かむもうたてものぐるをしければ、問ひさして、とかうこしらへてあるに、五六日ばかりになりぬるに、音もせず。例ならぬほどになりぬれば、あなものをぐるをし、たはぶれ言とこそ我はおもひしか、はかなき仲なればかく

てやむやうもありなんかしと思へば、心ぼそうてながむるほどに、出でし日つかひし泔さいの水は、さながらありけり。うへに塵ちりみであり。かくまでとあさましう、
〔一〕たえぬるかかげだにあらはとふべきをかたみのみ
づはみくさゐにけり

など思ひし日しも、見えたり。例のごとにてやみにけり。かやうに胸つぶらはしきをりのみあるが、世に心ゆるびなきなん、わびしかりける。

（蜻蛉日記 康保三年八月）

右の例では、夫が出ていった日（五、六日ほど前）に、夫が使った泔さいの水がそのままになっていた、その水の上に塵ちりが浮かんでいた様子を「みくさゐにけり」と表現している。ここで言う「みくさ」は、何日も溜めていた水の上に浮かぶ塵のように、水面を覆って浮かぶ浮草様の水生植物を指している。

したがって、「水草ゐにけり」の「水草」には、ある程度背が高くなるものと、浮草様のものの両方が含まれるということになる。橘守部も『神楽歌入文』の中で「水草と云には、浮草をも包たれば、居とも云べし」と述べている。また、いずれの場合も、重種本本文左「異説」の第五句は、「水草が生じてしまったよ」という意味になるのは同じで

ある。

最後に、重種本、鍋島家本の「みづさびにけり」について検討する。

「みづさびにけり」という句は、他例が見られない。「水（みづ）」と「さぶ」でも同様である。この句を逐語的に解釈すると、「水が『さび』てしまったよ」となり、「さぶ」の意味が重要となる。

現代の神楽歌解釈の草分けとなつた西角井正慶の『神楽歌研究』では、「みづさびにけり」を「神さぶのさぶ同様、その状態になることで、水の精霊を讃めているものと思ふ」としている。また、池田弥三郎は、「水が水らしい特性を示している。あるいは、水が神々しく、ひどく尊いということか」と解釈した。つまり、「杓」末歌第五句「みづさびにけり」の「さぶ」を「神さぶ」、「をとめさぶ」、「翁さぶ」等の「さぶ」同様、名詞に付いて、いかにもそれらしいさまにある意を表す動詞を作る「さぶ」としているのである。この場合、第五句の解釈は、「御神水らしくすばらしい水になつたことだ」となる。

一方、古くは賀茂真淵が『神楽歌考』で「みづさびにけり」を「水洪の浮るなり」とし、本居大平もこれを支持した。熊谷直好も『梁塵後抄』において「水さびの浮て清からずなれるなり」と解釈し、最近では小西甚一もこれらを

採用して「水洪がついてきたことだ」と解釈している¹¹¹⁾。また、白田甚五郎は、小西説、池田説を挙げた上で、「さぶ」は古くなる意」と注釈し、第五句を「水が古くさくなくなつてしまった」と現代語訳した¹¹²⁾。こちらは、第五句の「さぶ」を「ちりつものこそぞのまくらもさびにけりこひするひとのぬるよなければ(『伊勢大輔集』第三卷 二ひ七二)」等の「さぶ」のように、人の訪れが絶え、時間の経過とともにものが古びる「さぶ」の意味でとっているのである。

さて、前章でも触れたが、平安期写譜本の中で歌詞に古体を残していると考えられるのは、十世紀末―十一世紀初頭の写で現存最古とされる和琴秘譜である。西角井は、「みづさびにけり」を「水洪がついたと解くのは根拠のないことと思ふ」と批判し、第五句が「水草生ひにけり」だと井が「荒れたことになる」と難を示した¹¹³⁾。しかし、古体である和琴秘譜等の本文は「みくさおひにけり」であり、この時から既に井が荒廃したことを歌っているのである。したがって、重種本、鍋島家本の第五句「みづさびにけり」の「さぶ」を古くなる意と取ることに無理はない。また、重種本、鍋島家本よりも後の一条兼良『梁塵愚案抄』では、重種本本文左「異説」と同じ「み草ゐにけり」の本文を持つ本が底本とされていることから、「水草が生じてしまつ

たよ」と井の荒廃を歌う本文がかなり後まで存続していた可能性がある。「みづさびにけり」を井に涌く御神水を褒めることばとするのは、一見神楽歌の解釈として穏当なようにも感じられるが、古体とまったく逆の意味に解釈することにはかえって無理がある。

以上のことから、重種本、鍋島家本の「杓」末歌第五句「みづさびにけり」の「さぶ」は、小西甚一や白田甚五郎等の指摘するように「古くなる意」であるといえる。また、第五句の解釈についても、白田氏の「水が古くさくなくなつてしまつたよ」とする説が妥当だろう。重種本、鍋島家本の「杓」末歌第五句「みづさびにけり」から派生したと思しき歌語に「みさび」があり、同語は「水洪」のほぼ同義語と認識されてきたらしいが¹¹⁴⁾、もとの神楽歌の「みづさびにけり」のいう「水」が「さぶ」状態が、即「水洪」や「水鏡」の浮かんだ状態を指しているとは言い切ることにはできない。「水洪がついてきたことだ」等とするより、「水が古くさくなくなつてしまつたよ」とする方が穏当である。

以上、大きく分けて三系統の第五句異同本文を比較した。重種本と鍋島家本がとる「みづさびにけり」は表現の面でも他と一線を画しているが、いずれも人の訪れが絶え、荒廃した井の様を歌っている点では同じである。ただし、このような異同が生じた理由は明らかでない。

最後に、三系統の異同本文の解釈を挙げておく。

わたしの家の前の板筒井の清水は、人里離れたところにあるので人が水を汲まないために、

(重・鍋) 水が古くさくなってしまったよ。

(重異説) 水草が生じてしまったよ。

(和・鍋右注・古今・六帖) 水草が生えてしまったよ。

四、おわりに

以上、神楽歌「杓」本末歌の異同本文について解釈を試み、検討を加えた。

本歌については、最初に現存最古の神楽歌譜本とされる『神楽和琴秘譜』の歌詞の持つ表現上の問題点を指摘した。すなわち、第二句「せが井のみづを」を目的語にとる語が第四句の掛詞「とり」の「取り」であるとしか考えられない点、そして、この「水(を)取る」という表現が、当時一般的ではなかった点の二つである。そして、神楽歌「杓」本歌の異同は、その古体の表現上の難点を克服するため、「汲む」という語を新たに歌詞に取り入れようとして生じたものである可能性を指摘した。さらに、この「汲む」という語を取り入れる過程で、第二句「ひささ」の語を重視

した神楽歌譜本と、これに重きを置かなかつた六帖との意識の違いにも触れた。すなわち、神楽歌譜本は、御神楽の場で神座(採物)となる「ひささ」の語を重視し、これを残すために第五句に異同を生じた。一方、六帖は「井」の項目に収める和歌として「せが井」の語を重視し、「ひささ」の語はとくに重視しなかった。そのため、第三句「ひささ」の語を欠く形の歌詞を採録したのである。

また、末歌では、第五句の異同本文を和琴秘譜、古今集、六帖の「みくさおひにけり」と鍋島家本文右注の同「みくさおひにけり」の一群、重種本文左「異説」の同「水くさるにけり」、そして重種本、鍋島家本の同「みづさびにけり」という三系統に分け、これらについてそれぞれ検討を加え、解釈した。いずれも、井の荒廃を歌う点では同じであるが、その様子を具体的に「水草が生えた」と歌う和琴秘譜等の「みくさおひにけり」や重種本文左「異説」の「水くさるにけり」と、「水が古くさくなってしまった」と歌うにとどめる重種本や鍋島家本の「みづさびにけり」は表現の上で一線を画している。しかし、そのような異同が生じた理由は不明であり、課題として残る。

以上のように、神楽歌「杓」は、本歌、末歌とも、古体と見られる和琴秘譜の歌詞からはかなりの異同が生じている。その、異同本文を詳細に検討することにより、鍋島家

本本歌第二句「しみづ」の例のように、解釈が決定することもあり、鍋島家本や同系統の譜本の歌詞のみを解釈するだけでは不十分であることは明らかである。同様に、歌謡の異同本文の比較検討は、各歌詞の解釈に影響を与えると考えられ、歌謡全体の歌詞解釈において再考されるべきである。また、異同の性質によっては、そこから各本の書写意識や編集意識を指摘できる可能性もある。今一度各古写譜本や和歌集等の本文異同に注意を払い、実証的な解釈を進めることが重要である。

最後に、神楽歌「杓」の本歌と末歌の関係について、私見を述べておきたい。

従来、「杓」の歌詞は男女の贈答歌を神楽歌に取り入れたものと言われてきた。たとえば、白田甚五郎は、本歌の「鳥は鳴くとも」の句から、「後朝の思いが込められ、筑波山の耀歌のような、聖水の井を中心とする歌垣に男女の交わる民謡であるらしい」、「本方が男で、この末方が女であるとみるのがよからう。前歌で、男が清水によせて女をたたえるのに対して、ここは女が、そんなうまいことをおっしゃっても、何ですか、長い間私を放っておきながら、とっつぱ返しをくわしているのである^{二三}」と解釈している。

「杓」本末歌を元は男女の贈答歌とする解釈は首肯でき

る。末歌の重種本本文左「異説」に見られる「水草ある」の語は、『枕草子』一七一一段に、「女一人住む所はいたくあばれて、築土なども、またからず、池などある所も、水草ぬ、庭なども、蓬にしげりなどこそせねども、所々、砂子の中より青き草うち見え、さびしげなるこそあはれなれ。」とあるように、人の住む場所、とくに女性の元へ訪れがなくなつて久しいことの象徴であつた。次もその一例である。

五三 さもこそはよるべの水に水草ぬめ今日のかざしよ
名さへ忘るる^{二四}

(源氏物語「幻」中將の君)

同様の例は他にも多数見られる。小西甚一は本歌の「せがぬ」の語を「夫が井」でないかとし、「ふつう男が音の所へ通つてゆくだけけれど、逆の例も稀には見られる」として、本歌を女性、末歌を男性の歌とした^{二五}。だが、「水草ぬ」た水に自分を重ね、恋人の訪れないことを嘆くのは圧倒的に女性が多かつた。

さて、では、元々これらが男女の贈答歌であつたとして、神楽歌における「杓」本末歌の関係は、どのようにとらえるべきだろうか。

神楽歌「杓」末歌第五句の古体「水草生ひにけり」や「水草みにけり」では、本来賞賛されてしかるべき御神水をたたえる井が「荒れたことになる」と西角井が難じていることは三章で触れた。だが、末歌の主体を女性から神に移せば、神の視点から、「私の板筒井の水は、人（この場合祭祀を担う人間であろう）が訪れることがないために水草が生じてしまったよ」と歌って祭祀をうながす内容であると解釈できる。これに対して、本歌では「水を汲んで、鶏鳴と共に夜が明けようとも、歌舞の遊びをしよう（しなさい）」と歌っている。重種本、鍋島家本、六帖等に見られる「汲む」の語は、「水を汲む」意と「気持ちを酌む」意の掛詞としてしばしば和歌に用いられた。

八七 いにしへの野中の清水ぬるけれど本の心をしる人ぞくむ

（古今集 卷第十七 雑歌上「だいしらず」
読み人知らず）

一四六 おもふとはなにをかさらにはし水こころをくみて人はしらなん

（六帖 第三水「水」）

（略）京より出づるひ、やはたにまうでてとまりぬ、その夜月面白うて松の梢に風すずしくして、むしの声もしのびやかに鹿の音はるかにきこゆ、つねのすみかならぬ心地も、よのふけ行くにあはれなり、げにかかれれば神もすみ給ふなめりと思ひて

一 こころにしもわきて出でける石清水神の心をくみて知らばや

（増基法師集）

右の増基法師の歌のように、「神の心を察する」という意味でも「汲む」の語は使われている。「杓」本歌の歌詞に「（神の）こころ」の語はないが、御神楽の場で歌われた歌謡であることを考えれば、「杓」本歌の「汲む」の語にも「（心を）汲む」の意味が内包されていた可能性は否定できない。実際、神楽歌「杓」を本歌取りした顕季歌ではそのように理解されている。

七五六 おもしろくなりぞゆくなるひさごもて神のこころをくみてけるかな

（夫木和歌抄 卷第十八 冬部三「天仁二年十一月
家の歌合、神楽」修理大夫顕季卿）

このように、神楽歌「杓」の末歌と本歌は、神からの祭祀の要請と、それに対する人間からの応諾という対をなすと見ることが出来る。後に鍋島家本では同箇所が「あそぶせをくめ」となり、命令の主体が曖昧になることで、両者の関係性も曖昧になる。だが、古今集に「ひさご」の語を持たない末歌のみが採られ、六帖で本歌と末歌が逆順に並べられたのは、同時代の古体の歌詞をこのようにとらえたためかもしれない。

〈参照資料〉

○神楽歌の平安期写譜本

参照した歌謡譜本と各底本は以下の通りである。

『神楽和琴秘譜』

……陽明文庫編 陽明叢書国書篇第八輯『古楽古歌謡集』

一九七八年九月 思文閣出版

信義本『神楽歌』・重種本『神楽歌』

……官幣稲荷大社複製 一九三一年二月

鍋島家本『東遊歌 神楽歌』

……古典保存会複製 一九三八年八月

○一条兼良『梁塵愚案抄』・熊谷直好『梁塵後抄』

高野辰之編『日本歌謡集成』改訂版 卷二 中古編 一九六〇

年七月 東京堂出版（私に適宜濁点・句読点を付した）

○賀茂真淵『神遊考』

国学院編輯部編 賀茂百樹校訂『賀茂真淵全集』第二 一九〇

三年十一月 弘文館

○本居大平『神楽歌新釈』

本居豊頼校訂『本居全集』第六（本居春庭 大平 内遠 全集）

一九〇三年二月 吉川半七ほか発行

○橘守部『神楽歌入文』

橘純一編 久松潜一監修『新訂増補 橘守部全集』第七 一九

六七年九月 東京美術

○萬葉集

佐竹昭広ほか『補訂版万葉集本文篇』一九九八年二月 塙書房

訓読は、小島憲之ほか校注訳 新編日本古典文学全集6―9『萬

葉集』①④（一九九四年九月―一九九六年八月 小学館）を

底本とし、佐佐木信綱ほか編『校本萬葉集』一一―十八（一九九

四年三月―一九九四年十二月 岩波書店）、廣瀬捨三ほか編『校

本萬葉集』別冊一一―三（一九九四年九月―十一月 岩波書店）

を参照した。

○古今和歌集

底本……小島憲之ほか校注 新日本古典文学大系5『古今和歌

集』一九八九年二月 岩波書店

対照本……久曾神昇『古今和歌集成立論』一九六〇年三月―一九

六一年十二月 風間書房

片桐洋一『古今和歌集全評釈』一九九八年二月 講談社

『古今集校本』二〇〇七年十一月 笠間書院

○古今和歌六帖

底本……宮内庁書陵部編 図書寮叢刊『古今和歌六帖』一九六

七—一九六九年 養徳社（私に濁点を付した）

対照本…永青文庫編 細川家永青文庫叢刊『古今和調六帖』一

九八二—一九八三年 汲古書院

○他の和歌は、とくに断らない限り、『新編国歌大観』CD-ROM版

Ver. 2（『新編国歌大観』編集委員会監修 二〇〇三年六月

角川書店ほか）によった。各歌に付した歌番号は同書による。

○日本書紀

坂本太郎ほか校注 日本古典文学大系67『日本書紀 上』（一

九六七年三月 岩波書店）ふりがなは、私に省略した箇所があ

る。

○倭名類聚抄

京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成 倭名類聚抄

〔本文編〕』一九六八年七月 臨川書店

○蜻蛉日記

今西祐一郎ほか校注 新日本古典文学大系24『土佐日記 蜻蛉

日記 紫式部日記 更級日記』一九八九年十一月 岩波書店

○源氏物語

阿部秋生ほか校注訳 新編日本古典文学全集20—25『源氏物語』
一九九四年三月—一九九八年四月 小学館

○枕草子

松尾聰ほか校注訳 新編日本古典文学全集18『枕草子』一九九

七年十一月 小学館

○大鏡

松村博司校注 日本古典文学大系21『大鏡』一九六〇年九月

岩波書店

〈注〉

(一) 古今集、六帖等に収められた歌謡の同類歌については、拙稿『古今和歌六帖』所収の平安期歌謡について（『国語学文』第七十八巻第九号 二〇〇九年九月）において詳述した。

(二) 高田与清『楽章類語鈔』（文政二年刊）等。

(三) 熊谷直好『梁塵後抄』等。

(四) 西角井正慶『神楽歌研究』（一九四一年五月 畝傍書房）では異同についてもかなり詳細に触れている。また、他の注釈書でも、本文異同として収めることは行われている。

しかし、いずれも十分とはいえない。底本文の逐語的解釈が困難な際には、他の異同本文の解釈を載せている注釈

書もあるが、その場合も根拠の提示や比較分析等が十分に
行われているとは言いがたい。たとえば、池田弥三郎ほか
編『鑑賞日本古典文学 第四卷『歌謡Ⅰ』』（一九七五年五月
角川書店）は後述する「杓」末歌第五句の異同箇所につ
いて、「水さびにけり」という本文を持つ『梁塵後抄』を底
本とし、鍋島家本を参照して、同語に「水が水らしい特性
を示している。あるいは、水が神々しく、ひどく尊いとい
うことか。」と注釈を加えている。しかし、曲全体の解釈で
は、同箇所を「水草が生えていることよ」と解釈しており、
整合性がない。これは和琴秘譜等の異同本文「みくさおひ
にけり」や、重種本等の異同本文「みくさむにけり」に基
づいて解釈したためと見られる。

(五) 以下、本文のゴシック体表記は異同の箇所に、傍線、波線
等は強調したい箇所に私に付した。また、信義本には「杓」
の曲がない。

(六) 本歌は第二帖 宅部「井」一三四一番歌、末歌は同じく一
三四〇番歌として収められている。

(七) 現在、最も新しい神楽歌の注釈書は、白田甚五郎ほか校注
訳 新編日本古典文学全集42『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄
閑吟集』(二〇〇〇年十二月 小学館)である。同書では
比較的事証的な解釈が行われており、神楽歌研究において
参考すべきところが多い。以下、本稿では、同書を中心に、

池田弥三郎ほか編『鑑賞日本古典文学 第四卷『歌謡Ⅰ』(前
掲四)、小西甚一ほか校注 日本古典文学大系3『古代歌謡
集』(一九五七年七月 岩波書店)を参照しつつ解釈した。

(八) 古今集 卷第十七 雑歌上 八七二番歌「五節舞姫を見て、
よめる」(良岑宗貞)は、鍋島家本東遊歌裏書に「倭歌」と
して見える。また、『貫之集』巻第四の屏風歌に「夏ばらへ」
の歌として載る和歌(四一五番)は、『承德本古謡集』に
「北の御門の御神楽」の曲として収められている。『承德本
古謡集』は、陽明文庫編 陽明叢書国書篇第八輯『古楽古
歌謡集』(一九七八年九月 思文閣出版)によった。
(九) 『校本萬葉集』によると、大矢本萬葉集では第六句を「あ
そふてゆかむ」と訓み、『萬葉集略解』では「あそびてゆか
な」と訓んでいる。

(一〇) この「杓」本歌第五句の異同についても、池田弥三郎は
「不明。歌われて、変化しすぎている」としている(前掲
四 鑑賞日本古典文学 第四卷 三三八頁)。
(一一) 『校本萬葉集』によると、寛永二十年版本『萬葉集』、『萬
葉考』では第六句を「もちこせるみづ」、「萬葉代匠記」精
撰本では「もてるこしみづ」、「萬葉集古義」では「もたる
をちみづ」と訓読しているが、いずれであっても「水」を
「(い)取る」という表現に変わりはない。

(一二) 二十卷本では第十一「寶貨部 玉類」に「水精 兼名苑

云水玉一名月珠（和名美豆止留太萬）水精也」とある。

(一三) ここでは、「瀬」の意味を明らかにして解釈している小西甚一説（前掲七 日本古典文学大系3）にしたがった。

同様に「瀬」の意味を明らかにして解釈していても、本居大平の『神楽歌新釈』では「水鳥のうかびてあそぶ溝井の瀬といふにてもあるべし」、熊谷直好の『要塵後抄』では「大原なるせが井の水を人して汲しむるに瀬におり居る鳥は鳴くとも猶其鳥のあそぶ瀬をくめといふ事」としている。しかし、他本の第五句「あそぶ」の主語は、いずれも人間である。鍋島家本第五句「あそぶ」の主語も同様であろう。

(二四) 賀茂真淵は『神道考』で「此歌古今六帖に、大原や、せかるの水を、手にくみて、鳥は鳴とも、遊びてゆかん、と有こそ本なりけんを強て匏の歌にすとて三の句をひさごとといひかへ」たのだと述べており、志田延義もこの説を採用している（『日本歌謡圈史』第二篇「神歌と風俗時代の研究」四「神楽歌の本体とその組織」三五三頁（一九八二年十二月 志文堂））。しかし、六帖所収歌には、収録された項目名等に合わせてことばを変えているものがあることが指摘されており（青木太朗『古今和歌六帖』における万葉集歌についての一考察 ―題との比較を通して―、久保木哲夫『古筆と和歌』二〇〇八年一月 笠間書院 三〇〇―三二七頁）、神楽歌「杓」本歌が収められた六帖の項目が

「井」であることから考えても、六帖歌を基準に置いて考えることは注意を要する。

(二五) 九曲十五種類ある「採物」の歌の中で、このほかに本末歌のいずれか一方にしか採物の名が見られないのは、鍋島家本『東遊歌 神楽歌』裏書の或説「劔」のみである。これも末歌に「たち」の語がない。

(二六) この点に関しては、前掲一の拙稿でも触れている。

(二七) 志香須賀本、六条家本古今集および寛親本古今集異本注記でも、同箇所が「やど」となっている。

(二八) 『校本萬葉集』によると、寛永二十年版本をはじめとする諸本の第五句に「尔」の字がない。「尔」の字を記しているのは、神田本、廣瀬本のみである。ただし、訓みはいずれも「みくさおひ〔い／ぬ〕にけり」である。

(二九) 前掲四『神楽歌研究』一一六、一一七頁。なお、西角井は、「みくさおひにけり」、「水くさゐにけり」と「みづさびにけり」を別の表現ととらえているが、「みくさおひにけり」については「解くまでもない」、「水くさゐにけり」については「歌譜の都合で生ひを、かう響かすのであらう」としているのみである。

(三〇) 前掲四 鑑賞日本の古典文学 第四卷 一三八頁。なお、注四で詳述しているように、曲全体の歌詞の解釈では、同箇所を「水草が生えていることよ」としている。

(二二) 前掲七 日本古典文学大系3 三〇六頁。

(二三) 前掲七 新編日本古典文学全集42 五二頁。

(二四) 前掲四『神楽歌研究』一一六頁。

(二五) 黒田彰子「みさび考」—俊頼と俊成(二二)—『愛知文教大学論叢』第2巻 一九九九年十一月)に指摘がある。

黒田氏は、平安期の「みさび」の詠作例を精査した上で、「み

さび」の語源は神楽歌「杓」末の「水草おひにけり」では

ないかと指摘し、かつ、従来同意語とされてきた「みさび」

と「みしづ」が「完全に同一の語でない」ことを指摘した。

(二六) 前掲七 新編日本古典文学全集42 五一、五二頁。

(二七) この和歌は、紫の上の死後、葵祭の日に、源氏が葵の花

を手にとって、「いかにとかや、この名こそ忘れにけれ」と

言ったのに対し、源氏の召人の一人で、かつて源氏と情を

交わしている中将の君が詠んだものである。歌意は、「いかに

にも、よるべの水が古くなって水草が生え、神のお憑りに

なることもなくなりましたが、久しくこの私をお見限りな

のはいたしかたございせんが、ほかでもない今日のかざ

しの「葵」—「逢う日」の名までお忘れになりますとは(阿

部秋生ほか校注訳 新編日本古典文学全集23)。

(二七) 前掲七 日本古典文学大系3 三〇六頁。

〔付記〕本稿第二章「杓」本歌(和琴秘譜・鍋右注)の解釈につ

いて、第四句「とりはなくとも」の「とり」を「鳥」と「取

り」の掛詞だとする解釈については、天理大学講師小山順

子氏からご教示を賜りました。深く感謝申し上げます。

(たばやし ちひろ・本学文学部非常勤講師)